出 張 報 告 書

下 関 市 議 会 議 長 殿　　令和元年(2019 年) 6 月１８日

職氏名	用　務
総務委員会 委員長　福　田　幸　博 副委員長　東　城　しのぶ 委　員　林　　真一郎 委　員　木　本　暢　一 委　員　戸　澤　昭　夫 委　員　濵　﨑　伸　浩 委　員　西　岡　広　伸 委　員　河　野　淳　一 委　員　村　中　良　多 市議会事務局 議事課長補佐　高　林　賢　次 議事課主任　深　田　明　義	委員会行政視察 １．オガールプロジェクトについて ２．八戸市を“まちぐるみ”でおもしろくする市民集団「まちぐみ」の取り組みについて ３．八戸ポータルミュージアム「はっち」について
期　間 令和元年５月２２日から 令和元年５月２４日まで	出張先 岩手県　紫波町　（１について） 青森県　八戸市　（２、３について）

〔調査概要・意　見〕

〇岩手県　紫波町（人口３２，９５８人、面積２３８．９８㎢）

現在の紫波町は、昭和３０年に１町８カ村が合併し誕生。岩手県のほぼ中央、盛岡市と宮沢賢治で有名な花巻市の中間に位置し、北上川が中央を流れ、東は北上高地、西は奥羽山脈までの自然豊かな町である。古くから物流の拠点として賑わい、周辺の農村と共に繁栄。基幹産業は、全国有数の生産量を誇るもち米、生産量県内１位のそばや麦、各種野菜が作られているほか、東部ではりんごやぶどう、西部では西洋梨などのフルーツ栽培も盛んである。また南部杜氏の発祥の地で、４つの造り酒屋がある。

［オガール紫波株式会社の説明］

対応：オガール紫波株式会社取締役　八重嶋雄光 氏

はじめに大会議室で資料に沿ってオガールプロジェクトに関する経緯・概要についての説明があり、その後、職員の方の案内でエリア内を順に現地視察を行った。（内容については、その要点について簡潔に記載する。）

１．オガールプロジェクトについて

（１）事業概要

ＪＲ紫波中央駅西側一帯の町有地１０．７ｈａの都市整備を図るため、町民や民間企業の意見を伺い、平成２１年３月に議会の議決を経て「紫波町公民連携基本計画」を策定。この計画に基づき、平成２１年度からスタートした駅前整備事業が「オガールプロジェクト」である。

オガールの由来は、フランス語で「駅」を意味する「Ｇａｒｅ（ガール）」と紫波町の方言で「成長」を意味する「おがる」を組み合わせた造語で、このエリアを出発点として、持続的に成長していくことを願って名付けたもの。

エリア内の施設は、平成２２年度から順次開発が進み、フットボールセンターを皮切りに、図書館・子育て支援施設・産直マルシェなどを備えたオガールプラザ、宿泊所・バレーボール専用体育館などを備えたオガールベース、役場庁舎などが整備された。

【オガールプラザ外観】

直近では、平成２９年４月にオガール保育園が開所され、現在、当初計画の施設は全て完成。開発は街区ごとに個別の事業体が実施している。

（２）プロジェクトの手法と成功した要因

平成１０年７月に公共施設用地１０．７ｈａを町が先行取得した後、事実上の計画凍結状態が続いていたが、その状況を打開し、プロジェクトを始動させた要因は、藤原前町長のリーダーシップと公民連携（ＰＰＰ）によるまちづくりの手法を藤原前町長へ提言した岡崎正信氏（※地元建設会社の長男で平成１０年にUターンし、オガールプロジェクトに参画。東洋大学でＰＰＰの手法を学ぶ。現在はオガールプロジェクトをモデルに、全国各地へ公民連携事業を水平展開している）の熱意が大きかった。

施設整備が目的となり、完成後に運営が立ち行かなくなる複合施設は全国に多数あるが、そうならないために、まず、オガールプラザ（官民複合施設）では、必要業態、家賃相場、事業継続の可能性などテナント誘致に関する調査から開始。投資負担が少なく、借金返済が可能な設計を第一に考えた結果、テナント入居率１００％で事業をスタートすることができた。その他の施設（オガールベース、オガールセンター）も同様の手法により、資金面等で順調に開発が進んだ。

さらに、プロジェクトの推進組織として、紫波町の行政組織を横断する公民連携室を設置するとともに、まちのデザインやプロジェクト理念の指針役として、民間

有識者によるオガール・デザイン会議（メンバーは著名な建築士など）を組織したことも事業推進の大きな役割を担った。なお、オガール・デザイン会議は、現在も継続して組織されており、折にふれて、シンクタンクとして助言をしている。

（３）実績、効果等

プロジェクトの実績として、オーガールエリア内の従業員数が役場職員を除いて２５７人（Ｈ３０年６月現在）、施設利用者数（Ｈ２９年度）は約８２万（民間テナント利用者数を含めると１００万人）に上り、雇用の創出、交流人口の拡大が図られている。

また、紫波中央駅前の地価が、平成２８年は３７，３００円、平成２９年は３７，７００円、平成３０年は３７，９００円と上がっており、プロジェクトの効果として不動産価値の上昇も見られる。

なお、人口については前年比５％の減であり、岩手県内では２番目に減り方が低いものの、プロジェクトの効果とは言えず、他の地方都市と同様、人口減少は大きな課題の一つである。

（以下、主な質疑応答等）

Ｑ　プロジェクトを推進する中で障害はあったか？

Ａ　住民、行政、議会も含め全ての人にとって、公民連携（ＰＰＰ）は初めての取り組みであったため、事業用借地権の設定、複合施設の区分所有の設定など、一から計画を積み上げていかなければならず、全容が見えてくるまでのプロセスそのものが障害であったと言える。

Ｑ　プロジェクトがスタートして、約１０年が経過したが、町の職員の意識は変わったか？

Ａ　そんなに簡単に変わるものではないと思うが、公民連携（ＰＰＰ）など、民間の力を借りて新しい事業にチャレンジする前町長の精神が受け継がれている職員はいると思う。

Ｑ　今後の見通し、課題などは？

Ａ　現状では順調に推移しているが、１０年後にこの町がどのようになっているかは正直わからない。エリア内の新たな駐車場整備など検討中であり、このままうまく進んでいくように、一つ一つ課題に取り組んでいくしかないと考えている。少子高齢化、人口減少は全国共通の課題である。

【オガールエリア内を視察】

【バレーボール専用コートを見学】

○青森県　八戸市（人口２２万８，６２２人、面積３０５．５６㎢）

太平洋に望む県の南東部に位置する。気候は比較的穏やかで、夏は偏東風（ヤマセ）の影響を受け冷涼で、冬の積雪が少なく、日照時間が長い。江戸時代には八戸藩の城下町として栄えた。現在は臨海部に大規模な工業地区、漁港・商業港が整備され、優れた漁港施設や背後施設を有する全国屈指の水産都市であり、また北東北随一の工業都市でもある。平成２９年１月１日、全国で４８市目に中核市へ移行。

［八戸市の説明］

対応：「まちぐみ」組長　山本耕一郎 氏

八戸ポータルミュージアム「はっち」館長　三浦順哉 氏

はじめに「まちぐみ」組長　山本耕一郎氏から「まちぐみ」の取り組みについて説明を受け、続いて、八戸ポータルミュージアム「はっち」の館長から、施設の概要及び取り組みついて説明を受けた後、館長の案内で館内及び八戸まちなか広場「マチニワ」の現地視察を行った。（内容については、その要点について簡潔に記載する。）

２．八戸市を“まちぐるみ”でおもしろくする市民集団「まちぐみ」の取り組みについて

（１）「まちぐみ」の発足の経緯等

名古屋市出身でコミュニティアーティストとして全国各地で活躍している山本耕一郎氏と八戸市の関わりは、２０１１年２月八戸ポータルミュージアム「はっち」の開館に合わせて、山本氏へ「まちの中で何かおもしろいことをやってほしい」とオープニング企画を依頼したことがきっかけで始まる。

まず、吹き出し型のシートに、街中で集められたさまざまな楽しいうわさを書き出して貼りだす「八戸のうわさ」プロジェクトを実施。これは、これまで知らなかったことに興味を持ってもらう、面白いことを見つけて誰かに話したくなるなど、コミュニケーションを活性化させることを目的とした事業で、わかりやく、市民の目を引く企画であったため、メディア等でも注目された。

【街中に貼りだされている吹き出し】

その後、山本氏は、これまで全国の地域活性化プロジェクトを見てきた中で、イベント、勉強会等はいろいろな形で実施しているが、いずれも一過性のもので、継続しないものが多いと感じていた。そこで、八戸では動ける市民集団を作りたいとの思いで、空き店舗をリノベーションした市民が集える活動拠点を整備し、「まちぐみ」がスタートした。（※山本氏は、「はっち」の事業がきっかけで、八戸へ移住）

【活動拠点「まちぐみラボ」】

（２）「まちぐみ」のコンセプト

「まちぐみ」の基本的な理念は、目に見える形で、「なんか楽しそう」なことを仕掛け、“まちぐるみ”で人を巻き込み、まちのファンを作っていくことである。

「まちぐみ」は、活動を楽しみながら、知り合いがふえ、また参加したい、参加したら誰かに出会えると思える「場と機会」の提供を行っている。

「まちぐみ」に入会するには、申込書にニックネームと活動の中で生かしたい自分の特技を記入するのみ。市内、市外、国外を問わず賛同してくれる人は誰でも参加可能。２０１４年１０月に発足以来、現在４５０名が登録。組員は、国内のみならず海外に在住の方もいて、小学生から８０代までの幅広い年齢層となっている。

（３）各種プロジェクト

〇南部せんべいパッケージデザインプロジェクト

これまで南部せんべいの包装は簡易なビニール袋が主流だったが、便利でおしゃれなパッケージがあったらとの思いから、市民によるワークショップを通して、新たなデザインの検討を行った。その中には商品化したものもあり。

○八戸の伝統工芸である「南部菱刺し」を活用したプロジェクト

「はっち」の備品である椅子に、南部菱刺しを施すワークショップを開催。市民がひと針ひと針、丁寧に施した椅子が、実際に「はっち」で活用されており、市民が「はっち」に対する愛着を増す結果にもつながっている。現在も定期的にワークショップを開催。

○高校生とつくる南部せんべいカフェプロジェクト

高校生の若い発想で、南部せんべいの新たな可能性を模索しながら、地域文化にふれることを目的に、ワークショップを通じて、新しいスイーツを各種考案。その中でもせんべいティラミスが評判となり、現在もイベント等で販売している。

（４）今後の展望等

「まちぐみ」の活動を通して、市民一人一人が生きがいを見つけ、日々の生活が充実したものとなることで、まちを自分事として捉える人がふえていくことが目標であり、その結果、まちから離れる人が減り、まちに帰ってくる人がふえるような、人に投資をするプロジェクトを継続して取り組んでいきたい。

これまで行政主導の事業は、何かをやるときに明確な数値目標を設定し、その達成状況によって、評価されてきたが、これからの時代は、結果がどうなるか分からないが、チャレンジできる社会が必要であり、その取り組みを通して人を育てていけるまちが元気になると考えている。

（５）その他

「まちぐみ」の活動は今年で５年目となり、八戸市から毎年数百万円、計１，０００万円以上を支出してもらっているが、これまで一度も議会で批判されたことはなく、むしろ応援をしてもらっている。

（以下、主な質疑応答等）

Ｑ　市から事業費が支出されているが、使途のしばり等はあるか？

Ａ　特にしばりはない。大部分は拠点施設の家賃とプロジェクトの材料費に充てている。

【「まちぐみ」組長　山本耕一郎氏による説明】

【「まちぐみ」の活動を「はっち」内で紹介】

３．八戸ポータルミュージアム「はっち」について

（１）「はっち」の概要

①施設概要

名　　称	八戸ポータルミュージアム（愛称「はっち）
建物規模	地上５階　高さ 23.4m
建設費等	用地費 785,245 千円、調査設計費 272,326 千円、工事費 3,079,335 千円
開 館 日	平成 23 年 2 月 11 日
来館者数	開館以来、年間約 90 万人で推移（H30 年 8 月に 700 万人達成）

②建設に至った経緯及び目的

八戸市の中心市街地の空洞化や商業機能の低下が懸念される中、当初は集客施設として、山車会館及び地域観光交流施設を整備する計画があったが、市長のリーダーシップのもと、一過性の施設ではなく、長く中心市街地の中核施設となることを目指し、市民交流や観光ＰＲイベントに対応できる複合施設を建設することとなった。

【八戸ポータルミュージアム「はっち」外観】

（２）「はっち」の取り組み等

地域資源（文化、人、モノ、食、自然等）を大事にしながら新しい魅力を生み出

すため、「地域の資源を大切にすること」、「市民と協働すること」、「まちなかに回遊すること」を意識し以下の３つの事業を展開している。

〇会所場づくり

誰でも気軽に立ち寄れる憩いの場を提供。市民がバス待ちや待ち合わせ場所として利用するほか、高校生が自主学習の場所としても利用されている。また、「こどもはっち」を通して子育て世代も交流している。

〇貸館事業

ギャラリーやシアターを利用し、趣味の発表や作品展を開催。利用料金は地域の公民館並みとし、誰でも気軽に利用できる環境を用意している。

〇自主事業

地域の資源を活かし４つの柱に基づいた事業を展開している。

・中心市街地の賑わい創出
・文化芸術活動の振興
・ものづくり活動の支援、進行
・八戸の魅力発信、観光を通した地域活性化

（３）「はっち」の管理・運営状況

歳入は、施設利用に伴う使用料が収入の半分以上を占めている。

歳出は、光熱水費、委託料（警備・清掃・受付等）の維持管理経費のほか、多様な自主事業の経費、職員の人件費が主なものである。歳入約２，５８２万円に対し、歳出が約３億１，７３８万円（Ｈ２９年決算ベース）となっている。

一般財源から約２億９，１５５万円を充当しているが、市全体の活性化を目的とする施設であることを考えると、使用料を高く設定することや、事業を減らして経費を抑制することを優先するのではなく、市民や市外からの来館者が訪れやすい環境づくり、新たな興味・関心を喚起してまちに足を運びたくなるような事業展開を第一に考え、その実現に努めている。

施設の管理運営は、市の直営であり、館長を筆頭に企画運営グループ、総務経営グループの総勢２４名の職員とボランティアガイドスタッフなどで行っている。

（４）八戸まちなか広場「マチニワ」の取り組み

まちなかにある「庭」をコンセプトに、「はっち」の向かいの未利用地を活用して、開放感のあるオープンスペースの拠点施設を平成３０年７月２１日にオープン。屋根の付いたガラス張りの公園のイメージで、雨天時も利用できる。

光の広場、緑の広場、風の広場の３つの貸し出しエリアのほか、ステージの利用も可能。また、音楽等のパフォーマンスや移動販売車等による物品販売など１時間

単位での「行為使用」による貸し出しも行っている。

「マチニワ」では、「はっち」と異なるオープンスペースを生かし、マルシェや音楽イベントなど街中の回遊者をふやすための取り組みを行っている。

（５）その他

市民アンケート等でまちなかの賑わいがふえているかを問うと、実情は、まだまだとの回答が多いが、「はっち」の開館以来、中心市街地にＩＴ関係の事業者が多数進出してくれていること、本年春の路線価の発表で、中心市街地の路線価が２５年ぶりに上昇したことなど、着実に取り組みの効果は表れている。現在、中心市街地にマンションやホテル、新しい美術館の建設も進んでおり、さらなる賑わいの創出が期待できる。

【「はっち」館長　三浦氏による説明】

【「はっち」の館内を視察】

【「マチニワ」の外観】

【「マチニワ」を視察】